

井伏鱒二「山椒魚」論

—もっともらしい嘘について—

一

本論考の目的は、「山椒魚」におけるもっともらしい嘘（事実らしく見える虚構）を分析することにある。⁽¹⁾井伏鱒二は、インタビューの中で、次のように語っている。⁽²⁾

「山椒魚」に蝦が一匹出て来るんですよ、それが産卵するんですがね。それを僕は「彼」と書いているんです。教科書に載ったんだが、その参考書に「産卵する蝦を彼とするのはおかしい」と書いてあって、それを読んだ生徒が問い合わせて来るんですよ。そのころ僕は蝦が雄と雌と別だということを知らなかった。すし屋のおやじに、蝦は雄と雌が別か、と聞いたら、「さあ、わからない」と言うしね。この井伏の発言について、「そんなことより、わたしは無知

日置俊次

のせいかな、淡水の川にえびが泳いでいることの方が不思議でない」「こうした疑問は、とりたてるほどのこともない」という研究者の指摘がある。⁽³⁾淡水のエビが存在するかどうかは、調査すればすぐわかる。エビに雄と雌の別があるとは知らなかったという井伏の話は韜晦であり、生徒からの問い合わせを面白おかしくユーモアに包みつつ、柔らく反駁しているのである。「彼」という代名詞は、かつては男性でも女性でも用いたのである。自選全集テキストでは「彼女」に直されて、「かれ」とルビが振られる。鮓屋のおやじは、エビの雄と雌に味の違いはないといったかったのであろう。あるいはその発言もまた虚構である。ミミズやカタツムリのように雌雄同体の生物もいるが、エビはちがう。それがたとえ、「細部に拘泥して全体像を見失うな」という趣旨であろうとも、とりたてるほどのこと

ないと研究者が解釈を放棄したり、読者を判断停止に誘うべきではない。いかなる矛盾点や疑問点もあらかじめ封じめるべきではなく、重要な登場人物「小蝦」をおろそかに扱うべきではない。

もうひとつ例をあげる。東大教授の野崎歓は最新刊の井伏鱒二論の中で、「山椒魚」のラストシーンにおける山椒魚の状態について、次のように述べている。^④

「もう駄目なようだ」と蛙に打ち明ける言葉は憐れを誘うが、しかしそれでもなお彼には（そして彼によって無理やり共棲相手にさせられた蛙にも）、なおしばらくの生命は保証されているだろう。

野崎は、山椒魚が空腹で死ぬという解釈をしている。しかし、山椒魚は蛙に「もう駄目なやうか」と質問したのである。「駄目なやうだ」と答えたのは蛙である。山椒魚は死なない。空腹で死ぬのは蛙であり、蛙の生命は風前のともしびである。これは「すばる」に連載され、加筆修正され、多くの編集者の目が通ったのちに刊行された井伏論である。そこに蛙ではなく山椒魚が死ぬという意見が、当然のように提示されている。あり得ない解釈であろう。このように「山椒魚」という作品には、テキストが精密に分析されないまま、テキストとは別の次元で論じられ、それが称賛されるような状況が存在している。

本論考は、作品の中にある一つ一つの言葉を精査し、そこに矛盾や、もつともらしい嘘を発見し、その意味を考えようとす

る試みである。井伏における虚構の扱いが、実はあるところまで計算され制御されたものであることを明らかにしたい。また、長く定稿として親しまれたテキスト（旧稿）と、自選全集版で末尾がカットされたテキスト（新稿）について、どちらを採用するべきかという問題も考察しておきたい。^⑤

二

「山椒魚」では、「岩屋の外では、水面に大小二ひきの水すましが遊んでゐた。彼等は小なるものが大なるものの背中に乗つかり、彼等は唐突な蛙の出現に驚かされて、出鱈目に直線を折りまげた形に逃げまはつた」と描かれる。この「大小二匹の水すまし」について、考えてみよう。このシーンが重要であるのは、独身者の蛙が、カップルになっている幸せな虫を邪魔した構図になっているからである。しかしその場面のイメージに関しては、実は細部が明らかにされていない。

私は里山と水田にかこまれた土地に生まれ、アメンボやミズスマシやカエルやエビと遊びながら育った。現在も時間のある限り水鳥や昆虫などの観察を続けている。日本では、ミズスマシという名前は、ゲンゴロウに似た甲虫を指す場合と、アメンボを指す場合がある。毎年、学生にアンケートをとっているが、ミズスマシと言った時、それが甲虫なのかアメンボなのか、イメージが定まらない。特に西日本出身の学生には、アメンボのことをミズスマシと呼ぶ傾向がみられるようである。そもそも

甲虫のミズスマシは激減しており、甲虫の存在を知らない学生も多い。なおアメンボは、アメンボウと言つてもミズグモと言つてもよい。ここで問題にするのは「水すまし（ミズスマシ）」という名称の曖昧さである。『広辞苑』をはじめ、どの辞書を引いても、甲虫であるという指摘のほかに、アメンボの俗称、別称であると説明されている。特に俳句ではアメンボを指して「水すまし」が用いられる。表記にはいろいろあるが、「はるかぜや吹れそめたる水すまし」（加舎白雄『白雄句集』）、「つれづれに踞めば跳ねて水馬」（水原秋櫻子『葛飾』）、「水馬汝も肩車して貰ふ」（鷹羽狩行『遠岸』）などの句で、水すましというのは、アメンボを指している。

「山椒魚」のテキストと現実の虫たちを比較しよう。甲虫のミズスマシは、旋回するような動きをする。二匹のうち上に乗っているミズスマシが、下のミズスマシより小さいかどうか、わからない。一センチ以下の小さな虫で、動きが速すぎてよく見えない。しかし、アメンボの場合、上に乗るアメンボは下のアメンボより小さい。雄よりも雌が大きいからである。アメンボは直線的に水の上を進み、方向転換をする。雄と雌が重なったまま、直線を折り曲げた形で逃げる。アメンボは立ち上がるように水面に浮く。時々跳ねる。それに対して、甲虫のミズスマシは潜ることが得意である。「岩屋の外では、水面に大小二ひきの水すましが遊んでゐた。彼等は小なるものが大なるものの、背中に乗つかり、彼等は唐突な蛙の出現に驚かされて、出

鰯目に直線を折りまげた形に逃げまはつた」という文章を、数十年の長い時間をかけて考察してきたが、作中の水すましは、アメンボであると判断した。この結論は、次の井伏自身の言葉によつても確認できる。井伏は「山椒魚」について、次のように語っている。

サンシヨウウオを見たのは（旧制福山）中学の池で飼つていたのを見たのが初めてだが、招魂社のお祭りの時に練兵場の隣の広場に小屋掛けして「印旛沼の主」といって見世物にしていた。ろくろ首なんかもあった。太鼓叩いてやつた。そのサンシヨウウオは学校のサンシヨウウオを貸したのかもしれない。盥なんかに入れているの。どうもそうらしい。僕らが学校を出てから雨の降る日に街を歩いていたのをつかまえたつていう話を聞いたことがある。川の中にあるサンシヨウウオは見たことがない。僕たちの家の通りの川にはいないから。ひとつ向こうの裏側の村の川にいるのを木下夕爾君が見たつて言つた。早稲田に入つてから、ガーネットの英訳でチェホフを読んだ。そのころはチェホフばかりだった。（チェホフと中学のときに見たサンシヨウウオが結びついて）それで「幽閉」を（青木南八に見せるために）書いた。『世紀』に書いているんだ。その時は手を加えていない。『三田文学』に載せるとき清書（改稿・改題）した。とにかく文章を書くことを知らないんだから文章を（自然主義の文体から）変えなくちゃいけないと思つ

て、チェホフの影響もあつて翻訳調にしてれば情景が出る
と思つた。植物学は好きだつた。(谷川の様子は子供の
きから知つていたが)まあ空想なんだ。藻が生えたりして
いるけど、僕の方の川は花崗岩台地だから藻は生えない。
アメンボウなんかもない。淀んでる静かな沼なんかには
いるけど川にはいない。エビはいる。苔は湿地で西陽が射
さないからよく生える。「山椒魚」は閉じこめられて)ど
うしようもない感じだが、あれはもう少し変えてまとめて
書けばよかった。地震があるとかで、崩れて出られるよう
にすればよかったな。閉じこめられるなんていうのは、ま
あ滑稽なものだと思つていた。何ともしようがない。その
程度じゃないか。(ヒントを得た)チェホフの「賭け」で
は悟るんだけど、(チェホフは)本にするととき(その部分)
捨ててるね。悟るところは別に書いてるらしいんだよ。悟
りの気持を一分間でも二分間でも経験すれば、それなりに
書けるけど、観念のままじゃ具象が出ないと感じてやめた
んだ。

この引用文のうち、「藻は生えない。アメンボウなんかもい
ない。(中略)川にはいない。エビはいる」という個所に注目
したい。つまり「山椒魚」では、藻やアメンボを描いているが、
井伏がモデルとした川にはいないのだというのである。確かに
流れが速いところにはいないものである。また井伏は、「川の
中にいるサンショウウオは見たことがない」ともいつている。

井伏鱒二は川では見たことのないものを、空想を用いて、もつ
ともらしい嘘として描いている。ただし、サンショウウオその
ものとはつきあいがあり、また一般の川にエビはいるし、サン
ショウウオも棲んでいる。川によつては、あるいは川の場所によつては、藻が生えるし、アメンボもいる。描写がすべて嘘だ
ということではない。地震に関して付言すれば「幽閉」(「世紀」
1923・7)を発表して間もなく、井伏は関東大震災で罹災
する。「山椒魚」に現実的な地震のエピソードを取り込むこと
は可能であつた。なお、「山椒魚」は「三田文学」ではなく「文
芸都市」(1929・5)に発表されている。

井伏はアメンボの存在を虚構で描いたと述べているので、作
中で水すましと呼ばれている虫は、アメンボであると判明する。
アメンボに関する描写は、水すましの描写の他に登場しないか
らである。井伏の感覚では、水すましとはアメンボである。井
伏は、川にいないアメンボを、空想で作中に描いたという事実
を、自分ではつきり意識している。この点が重要である。どこ
まで事実でどこから虚構なのか、井伏は記憶している。いわば
虚構を統御しているのである。

「山椒魚」を読解する現場(教室)では、水すましは甲虫の
虫だと説明されている。私も中学生の時、教室でそう習つた。
疑問は封じられている。例えば、『少年少女日本文学館12 走
れメロス・山椒魚』というよく売れている本がある。⁽⁸⁾小学校低
学年から読めると書かれている。国語の教科書に載っている作

品が多く収められている。「山椒魚」に、詳しい注や説明がほとんどされている。水すましには甲虫の絵が載っている。体は黒く楕円形で、光沢がある絵である。「水面をぐるぐると回る」と説明がある。ぐるぐると回るのなら、「出鱈目に直線を折りまげた形」で水面を泳ぐという本文の内容と矛盾する。足の先ですぐと水面を滑っていくアメンボは、あたかも水の上でスケートをしているような風情であり、しばしば雄が雌の上に乗る。そのまま素早く方向転換するので、直線を折り曲げた形になる。彼らの脚が、すでに折り曲げた直線である。

教科書に掲載され、論じつくされているように考えられている短編「山椒魚」であるが、短い物語であるのに、いまだに言葉の意味が探求されていない。そのまま教育現場で不自然な解釈が強要されている。その前に、重要な言葉を地道に精査し、検討していく作業が必要である。

三

一九二九年（昭和四年）、井伏は二月に三十一歳となった。この年、十月二十四日の「暗黒の木曜日」から世界恐慌が始まる。いうまでもなく、昭和初年代の厳しい時代背景がそこに象徴されている。この年に発表されたのが「朽助のある谷間」（「創作月刊」3月）、「山椒魚——童話——」（「文芸都市」5月）、「屋根の上のサワン」（「文学」11月）といった作品である。

「朽助のある谷間」と「屋根の上のサワン」には、「山椒魚」

と同じ時代の空気が流れているということが出来るだろう。あるいは同じ手法が用いられているといってもよい。それは、もつともらしい嘘をめぐる手法である。「山椒魚」における、井伏的な虚構という手法を考えるために、この二作品を参考にしてみたい。まず「屋根の上のサワン」をとりあげよう。サワンは雁である。その雁の描写に、このような一節がある。

サワンは水面に浮かぶことを好んだのみではなく、水に潜ることも好みました。時としては十幾分間も水中にひそんでゐることさへもありました。

サワンはマガンであると思われ、潜水採食ガモではない。主に草食であり、どちらかと言えば陸上の生活に適應した体をしている。水中で自由に動けるカモは、多く魚貝を餌とする。マガンは、お尻を水面に出して逆立ちするようにもぐることはあるが、全身で十数分も水中に潜ることはない。ホシハジロやキンクロハジロでも、一分も潜水できない。水面採食ガモでもまれに潜ることはあるが、数秒のことで、水中にひそむことはありえない。ここは、「常識をくつがえしてサワンが潜る」「サワンは特殊能力鳥である」と主張している文脈でもない。自選全集では次のようにテキストが直された。

サワンは水面に浮かぶことを好んだのみでなく、水に潜ることも好みました。時としては水中にひそんでゐることさへもありました。

そもそも空を飛ぶ鳥で、十数分間の潜水が可能な鳥など存在

するのかどうか、疑問である。井伏も、どこかでそういう意見を聞いたのであろう。そのために「十幾分間」という時間の表現を消去した。しかし、これではまだガンに関して嘘をついている。ガンは水中に潜まない。それでも井伏は嘘を撤回しなかったのである。また作中には次のような記述がある。

雁といふ鳥は、元来、昼間の光線や太陽熱を好まないものらしいです。私がサワンをうつちやつておく時には、彼は終日、廊下の下にうづくまつて昼寝ばかりする習性でした。

確かにカモの仲間には夜行性が多く、夜間に採餌に出かける場合がめずらしくない。しかしハクチョウやガンは逆で、夜は湖沼などで休み、夜明けとともに採餌に出かける。特にガンが早起きであることは知られている。昼間に田んぼで落ち穂を拾う姿がよく見られる。夜行性のカモは、夕方ガンがねぐらとする湖沼に入る時刻に、入れ代りて採食場の水田へ向かうことがある。ガンが昼間の光線を好まないと描く手法は、あの空想による潜水の描写と同じである。井伏は、ガンが夜に旅立つイメージ、月や闇のイメージを増幅するために、そのような虚構の操作を行ったのであろう。潜水に関しては、もちろん鳥は卵生ではあるものの、母胎の羊水につかるような、退行のイメージを醸し出したかったのであろう。屈託して岩屋の中に引きこもるような、「山椒魚」と重なるイメージがここに指摘できる。このサワンが姿を消したとき、「私」は沼池へ探しに行く。

そこにもサワンはゐないらしい気配でした。岸に生えてゐる背の高い草は、その茎の先端にすでに穂状花序の花を開いて、私の肩や帽子に綿毛の花を豊富に散りそ、いだのです。

穂状花序は無限花序の一つで、長い主軸に花柄のない花を多数つけ、下から順次開花していくものである。グラジオラスを考えるとわかりやすい。茎の先端に花を開いているということは、花がすべて咲いたということである。それは花であつて種子ではない。ところが綿毛が散るというのは種子の状態である。タンポポ、アキノキリンソウ、コウヤボウキ、ガガイモなど、綿毛を飛ばす植物は、種子を飛ばすのである。この場面は秋の話である。もちろん花に綿毛が付いている場合もある。例えばチガヤの花穂は白い綿毛をもっている。それは五月の話であるからここはチガヤではない。いずれにしても、花の綿毛が散り注ぐというのは嘘である。さすがに井伏自身も気が付いたらしく、自選全集では次のように書き換えられている。

岸に生えてゐる背の高い草は、その茎の先端にすでに穂状花序の実をつけて、私の肩や帽子に、綿毛の種子が散りそいだのでした。

種子なのか花なのかという混同は、後述するが、重要なポイントである。茎の先端から実が付いているというのはやや変であるが、綿毛の種子という表現は受け入れることができる。この「屋根の上のサワン」も、よく教科書に掲載されている。先

ほどあげた『走れメロス・山椒魚』にも収録されている。しかし、雁が潜水するという嘘についても、夜行性だという嘘についても、「綿毛の花」が散るといふ嘘についても、すべて素通りしており、説明していない。調べればすぐわかることにはたぐさんの注がついている。作中の事実はもちろん自然界のままでもなくともかまわないが、虚構に気づかないのでは困る。これでは小学生が、雁は潜水するし、散る綿毛は花であると覚えてしまう可能性がある。この問題は、現在の教室における状況そのまま反映しているとみてよい。解釈の強要が行われているのである。

次に、「朽助のある谷間」から引用する。鳶色の瞳を持つタエトという少女が描かれる。

私とタエトとは驚きの瞳でもつて、枝の毛虫を眺めた。さうして彼女はおびたゞしい毛虫の群に興奮した挙句、彼女が裸体のまゝであることを忘れて、毛虫の習性について語つた。毛虫といふものは蝶々の幼虫で、蝶々は木の葉の裏の露を吸ひ、やがて無数の毛虫を生む。この単純な理科物語りには多少の誤謬さへもあるらしかつたが、私は彼女の理科物語りは非常に興味深いものであると思つた。何となれば、これは彼女が裸体であつたからで、さうしてお互に裸体であるといふことは、その裸体の持主達をしていちはやく親しい友人にさしてしまふものらしかつた。

アゲハやモンシロチョウは幼虫が青虫型で毛虫ではない。こ

こに登場する毛虫はマイマイガやドクガといった蛾の幼虫である可能性が高い。ただし、蝶と蛾を厳密に区別することは難しく、また蝶の幼虫にも毛虫型はいる。桜にたかる毛虫はエゾシロチョウの幼虫である場合も考えられる。蝶が木の葉の露を吸うというのも、微妙な話である。蝶は花の蜜を吸う。水も飲む。全面的に否定できない、しかし正確さを欠いた誤謬が積み重ねられている。語り手は、タエトというアメリカ人の血が流れる少女が裸体でいることから、エロティックな喜びを感じ、彼女の話の誤謬を肯定しようとしている。エロティシズムの前では、誤謬は許されるし、あるいは魅力にも変わる。誤謬とは、もつともらしい嘘ということになる。語り手が自身の手の内を明かしているようなこの描写は、もちろんユーモアをかもします。蝶々にはなれないだろうといわれる毛虫にも、身寄りは朽助しかないタエトにも、哀しみがにじみだす。このようなユーモアと哀しみを醸し出す嘘をつくことが、井伏文学の本質にあるのではないか。そこでエロスは重要な方法論となる。タエトは語り手の好色な意図に気づき、「あの嫌悪すべき目つきや笑ひかたは、私の心を常に悲痛にさせようといひます」とキリストに祈る。その言葉は読者をも打つてある。「エロス」と「あわれ」と「ユーモア」を自在に組みあわせ、いかにも現実らしいが、よく考えれば間違っている話を積み重ねつつ、井伏はゆくりと読者を翻弄し、打ちのめし、誘惑し、箠絡させる。そこには、百戦錬磨の「オレオレ詐欺」にも似た虚構の力がある。

それはとりもなおさず読者を屈服させる優れた筆力という意味である。このような誤謬の面白さ、誤謬の力というのが、ユーモアと哀感と混然一体の虚構となり、井伏の作品の特徴をなしていると考えられる。

四

「山椒魚」の次の一節を検証してみよう。

岩屋の天井には、杉苔と銭苔とが密生して、銭苔は緑色の鱗でもつて地所とり（小児の遊戲の一種）の形式で繁殖し、杉苔は最も細く且つ紅色の花柄の尖端に、可憐な花を咲かせた。可憐な花は可憐な実を結び、それは隠花植物の種子散布の法則通り、間もなく花粉を散らせはじめた。

山椒魚は、杉苔や銭苔を眺めることを好まなかつた。寧ろそれ等を疎んじさへした。杉苔の花粉はしきりに岩屋のなかの水面に散つたので、彼は自分の棲家の水が汚れてしまふと信じたからである。剰へ岩や天井の窪みには、一群づつの黴さへも生えた。黴は何と愚かな習性を持つてゐたことであらう。常に消えたり生えたりして、絶対に繁殖して行かうとする意志はないかのやうであつた。

この文章は、自選全集でもほとんど変化していない。「花粉を散らせはじめた」が、「花粉を散らしはじめた」に直されている程度である。まず、苔には花は咲かない。花は咲かないので、花粉もない。ただし俳句の世界では「苔の花」という。「苔

の花」というのは雄株にできる雄器の集まりを、花に見立てていうと多くの辞書の説明にある。苔の生殖は複雑なのでここには詳述しない。いづれにしても、苔が花粉を散らすことはない。また花粉が散つても芽が出るはずはない。花粉と種子は違ひ、花粉と胞子は違ひ。小学生でも知っている。

隠花植物は、花を咲かせない植物である。花がないので花粉もなく、種子もない。隠花植物が種子を散布するはずがない。苔の可憐な花が可憐な実を結ぶはずがない。さらにおかしいのは、種子散布の法則によつて、花粉を散らしたという記述である。種子の散布が花粉の散布だとか、実ができてから花粉が散るということはありえない。種子と花粉の同時散布などもあるはずもないが、この虚構は「屋根の上のサワン」の穂状花序の綿毛のところで用いられていた混同である。井伏はエロスを混沌化し、虚構化を行つてゐる。

前掲の『走れメロス・山椒魚』でも、たぐさんの注はこの矛盾には触れていない。これでは、小学生は、隠花植物が種子を散布すると思うし、種子とは花粉のことだと思つてしまう。花がないのになぜ種子ができるのか。花がないのになぜ花粉が飛ぶのか。種子ができた後になぜ花粉が登場するのか。これでは例えば、朝顔の種子ができた後に、朝顔の花が咲くという話になる。

先にも触れたように、私は中学生の時、国語の教室で教科書の「山椒魚」を学んだ。この部分を教師は、「井伏鱒二は実に

よく自然を観察しているね。ありのままの自然の描写が見事だ」と説明した。試験でもそう書かされた。しかし、だまされているという印象があり、その疑いは今もぬぐえない。

引用した部分で問題になっているのは「エロス」であり「生殖」である。わざわざ「花粉」というのもっともらしい嘘をもちだして、エロティシズムを喚起したのは、井伏がタエトの裸身とその誤謬とを合わせ描いたフィクショナルな方法である。⁽¹⁰⁾主人公の山椒魚は、川で生物たちが繰り広げる生殖活動の輪から外れてしまった自分を、岩穴の中で鮮烈に意識している。そこを読み解かなければ、山椒魚の悲しみの本質は解明できない。カビは「繁殖して行かうとする意志」がないから愚かである。しかし、その山椒魚のつぶやきが指し示すのは、繁殖する意志はあっても、生殖の輪から外れた山椒魚がさらに愚かであるという事実である。「山椒魚」からまた引用しよう。

或る夜、一びきの小蝦が岩屋のなかへまぎれ込んだ。この小動物は今や産卵期のまつただなかにあるらしく、透明な腹部一ぱいに恰も雀の稗草の種子に似た卵を抱へて、岩壁にすがりついた。さうして細長いその終りを見届けることができないやうに消えてある触手をふり動かしてゐたが、（後略）この一びきの蝦は山椒魚の横腹を岩石だと思ひ込んで、そこに卵を産みつけてゐたのに相違ない。

作品に描かれたのは、淡水エビのミナミヌマエビかヤマトヌマエビであると考えられる。いずれにしても産卵に大きな違い

はない。これらのエビたちは岩壁や草などには産卵しない。サンショウウオに卵を産み付けることはない。産んだ卵を抱卵するからである。雌は多くの卵をおなかの下に抱えて、孵化するまで面倒を見る。抱卵されなかった卵は孵化しない。小学生向けの『走れメロス・山椒魚』は、この誤りに対してやはり素通りである。ちなみにサンショウウオの雄は卵を守り、飲まず食わずで何かも抱卵に近い仕事をする。雌は岩屋で産卵し、すぐその場から消えてしまう。

エビに雄・雌があるとは知らなかったと韜晦する井伏だが、ここでもっともらしい嘘をつきながら描き出したものは、卵であり、産卵であり、「生殖」のイメージである。それは山椒魚の最も痛いところをつくイメージである。そのために焦った山椒魚は、プライドを捨てて、岩屋の穴に突進する。⁽¹²⁾山椒魚は、その生命力という自らの火に焼かれるように行動している。

五

さきほど引用した井伏の言葉の中に、「そのサンショウウオは学校のサンショウウオを貸したのかもしれない。盥なんかに入れているの。」「それで「幽閉」を（青木南八に見せるために）書いた。『世紀』に書いているんだ。その時は手を加えていない。『三田文学』に載せるとき清書（改稿・改題）した。」という部分があった。

「山椒魚」発表の前年、一九二八年に「鯉」（『三田文学』2月）

が発表されている。これも「山椒魚」と同じく、以前に発表した作品の改稿である。ただし改稿、改題ということであれば「幽閉」の話で、井伏は、「幽閉」を「三田文学」に載せたかのように語る。井伏は「幽閉」と「鯉」を取り違えた。そこには理由がある。サンショウオもコイも、ともに川の王者である。「幽閉」は青木南八のために書かれた。「鯉」は青木南八について語る小説である。そこでは鯉は鯉に入っている。井伏の通った中学校の池からとらえられて盥に入られたサンショウオの姿が、そこに二重写しになる。同じインタビュの中で、井伏は「鯉」についてこう語っている。

青木南八に「愛人」はいなかったんだよ。(青木が亡くなった) そのとき上野の松坂屋の前の反対側の空き地に勤工場ができた。そこでサボテンを買って青木の所へ持って行ったら、(青木の) お母さんが(二階から) 降りて来て泣いているんだよ。(その時玄関に) 靴がいろいろ脱いであったんだ。急いで二階へ上がつて行くような感じで。(その中に赤い) 靴が脱いであった。その印象があるんだ。愛人はいないんだから、(釣りには行かなかった。池は下宿屋の池で) コイはいやしない。青ミドロの(小さな) 池なんだから。(青木からコイをもらったことはいないが) ほかの人にはもらった。子供のときに(いなかの池に) 白いコイがいたの。随筆と言うより小説だな、あれは。青木の兄さんは本当だと思っているよ。本に書いてるの。

青木南八に愛人がいなかったことが強調される。伴侶もなく夭折したのである。愛人というフィクションは青木へのはなむけであろうか。いずれにしても井伏はエロスの導入を図ったのである。井伏は小説「鯉」が虚構であると語っている。完全に虚構なのではなく、それぞれのイメージには根拠がある。事実にもっともらしい嘘という調味料がまぜこんであるというべきであろうか。ほかの井伏の発言を調べると、小説と随筆の違いは「嘘」にあると述べている。

ぼくは、小説も随筆も詩も書くといわれているけど、小説だから随筆だからわからない作品があると訊かれたときは、ウソがあってもいいのが小説だと言った。……それと、雑誌だって小説欄と随筆欄では稿料がちがっていたんだ……(笑)。

小説には、フィクションを入れる。嘘があってもいい。この発想は重要である。涌田佑は、井伏との最後の会話を次のように記述している。

私が井伏氏の温顔に接した最後は、昭和六十一年十月一日、終日秋雨の降り注ぐ日であった。例の如くいろいろとお話をうかがったのであるが、談たまたま「侘助」に及んで、「先日、「侘助」の波高島周辺を調べてみたのですが、みんなフィクションでした」と申し上げると、

「そう、みんなフィクション」という答え。

重ねて私が「それにしても、歴史小説で百パーセント、

フィクションとは——」と申し上げると、

「あそこに立てば君、それくらいの空想は湧くわね」

井伏氏の歴史小説たるやおおよそかくの如きで、なかなか一筋縄ではゆかないものがある。

歴史小説でも虚構を用いる。しかし、チェホフの「賭け」について触れたインタビュアーでは、「悟りの気持を一分間でも二
分間でも経験すれば、それなりに書けるけど、観念のままじゃ
具象が出ないと感じてやめたんだ」と井伏はいう。山椒魚の悟
りは、体験してないので、虚構としても書くことができなかった
というのである。具象が出なければ書けない。どんな嘘でも
つけるわけではなく、現実^⑩に立脚して具象が描ける嘘は活用し
て、ユーモアを生み出す。しかし、悟りは、嘘としても描くこ
とができない。井伏の嘘は野放図な嘘ではなく、体験され、計
算され、抑制されている嘘なのである。

六

新稿で削除されたのは次の部分である。

ところが山椒魚よりも先に、岩の窪みの相手は、不注意
にも深い嘆息をもらしてしまつた。それは「あ、あ、」と
いふ最も小さな風の音であつた。去年と同じくしきりに杉
苔の花粉の散る光景が、彼の嘆息を教唆したのである。山
椒魚がこれを聞きのがす道理はなかつた。彼は上の方を見
上げ、且つ友情を瞳に込めてたづねた。

「お前は、さつき大きな息をしたらう？」

相手は自分を鞭鍵して答へた。

「それがどうした？」

「そんな返辞をするな。もう、そこから降りて来てもよろ
しい。」

「空腹で動けない。」

「それでは、もう駄目なやうか？」

「もう駄目なやうだ。」

よほど暫くしてから山椒魚はたづねた。

「お前は今どういふことを考へてゐるやうなのだらうか？」
相手は極めて遠慮がちに答へた。

「今でもべつにお前のことをおこつてはゐないんだ。」

「杉苔の花粉の散る光景」とあるが、杉苔にもし花粉があつ
たとしても、めしべがないので花粉を散らせる意味がない。こ
のもつともらしい嘘によって、めしべの不在、女性の不在がほ
のめかされることになる。花粉は無駄に散っている。その後に、
蛙の死を浮かび上がらせる会話が始まる。蛙が今でも、つまり
始めから怒っていないと告白する末尾は、まとまりのある、詩
情に満ちた終わり方であると考えられるが、井伏はそのように
は考えていないらしい。「山椒魚」について^⑪という文章で、
次のように述べている。

私はチェーホフのこの作品にそそられて「山椒魚」を書
きました。山椒魚といふ動物は、見たところも愚鈍なよう

な外見です。迂闊者として扱っても不自然ではないやうな気がします。空腹でたまらなくなつて来ると、自分の手を食つて餓を凌ぐこともあるさうです。馬鹿なやつだと思ひます。それで私は山椒魚を主人公にして、愚行の果ての孤独から諦観、諦観から悟道に至る者の心懷を、自分流儀に現わしてみるつもりで書きました。しかし諦観に近づくところまでは四圍の情景も空想することができました。それから先のことは説明にたよらなければ自分には書けないことがわかりました。書くには書いても、後の方は氣に入らないから切つて棄てました。「山椒魚」が尻切れとんぼに終つてゐるのは、実はそういふいきさつです。

空想ができなかつたので「尻切れとんぼ」となつたというのである。その「尻切れとんぼ」には意味がある。ここに悟りがないということは、絶望もあり迷いもあるということである。しかし、希望もあるということである。「地震があるとかで、崩れて出られるようにすればよかつたな。」という井伏の發言も先に見たとおりである。

雁が水中で引きこもりのような状態になつてゐるという嘘にも、エロスの連環から外れた嘆きが隠されてゐた。作品「山椒魚」にちりばめられた多くの嘘は、生殖やエロスに関する嘘である。山椒魚が性の連環から外れて、性のねじれがそこに生じてゐる。同様にして、隠花植物が種子散布して花粉を飛ばすというやうな嘘（あるいは「屋根の上のサワン」の花の綿毛が散

り注ぐというやうな嘘も同様に）が、エロスのねじれをうかびあがらせる。

山椒魚の岩屋は、母胎の羊水と、ぬめりと、ぬくもりを思わせる空間である。山椒魚は母胎の中に退行するように引きこもつて、窓から、外で盛んに繁殖活動を行う生物たちを眺め、目を背ける。岩屋内に繁殖する苔や黴をいやがる。しかし、産卵期の小蝦が岩屋に入つてきたときは、それを食べることもせず、ある意味で大切に扱つてゐる。

アメンボの交尾を邪魔した独身者の蛙（山椒魚の岩屋から水面が見通せるのは不自然であり、視点の虚構がある）が、岩屋に入つてきた。蛙は山椒魚の餌である。しかし山椒魚は蛙を食べなかつた。これは、さきほどの小蝦の構図の繰り返しである。蛙が両生類で独身者であることから、山椒魚にさらに近い存在として登場したのである。小蝦の構造が繰り返されるのであるから、注意深い読者には、末尾部分の「和解」などなくとも、いづれ蛙が自由になることは想像がつく。山椒魚と蛙が喧嘩を続けたまま、そこで終わる自選全集版のテキストは、まさに「尻切れとんぼ」という印象を与えるが、ある意味で明るく、ハッピーエンドを導きうる。瀬戸内寂聴は、この新稿について、次のように述べてゐる。¹⁶

音読してみたら、はつきり、改作がいいと私は感じた。山椒魚と蛙の何となく妥協あつたやうな、すりよつた感じの對話には、抜け道のない絶望の中に、一抹の甘さと救

いのようなものを感じさせもするが、この対話がすばっと抹殺されてみると、そこには、二匹の動物のより深い絶望と孤独がくつきりと投げ出されて、厳しく深い余情を感じるのである。(中略)

井伏鱒二は、晩年になって、「山椒魚」から一はけ色づけていた甘さを消し去ってから、いつそう、出口のない、どうしようもない山椒魚の運命と絶望に、深く熱い同情をそそいだのであろう。

新稿の終わり方に、瀬戸内寂聴は、深い絶望と孤独を見ている。この絶望の感覚ゆえに、多くの批評家たちが新稿を拒絶した。しかし本当に、新稿は絶望のテキストであるといえるのだろうか。山椒魚と蛙の口論は、その先に微かな希望を浮かび上げさせるのではないか。

蛙と山椒魚の口論の背後には、外に出たい、自由になりたい、生殖活動をしたいという意思が働いており、口論こそが彼らの生きる希望を継続させるための装置になっている。トムとジェリーが、永遠に追いかけてこをやめないようなものである。しかし、旧稿末尾に見られる、山椒魚と蛙の和解や、蛙の死は、そうした装置、あるいは習慣の継続を不可能にする。岩屋の外に出たいという生命力の発露として、山椒魚は蛙を幽閉したのだが、その意志の輝きも胡散霧消させる雰囲気を作り出している。少なくとも、蛙はいつか外に出られるはずではなかったのか。

旧稿末尾には、自己中心的な理由から山椒魚が蛙を幽閉してしまい、結局蛙を殺してしまったという、山椒魚の罪の意識が前面に出てくる。蛙の死体が岩屋の内部に残る以上、山椒魚は永遠に自責の念に押しつぶされる。これが旧稿の先に予想される物語である。このような終わり方に納得する読者ばかりではないはずである。ラストシーンに急展開としてカルネアデスの舟板のような感覚を生み出すことが、この作品の求めるところであったとは思われない。蛙の唐突な死には、必然性が見つからないであろう。

「山椒魚」には、性的暗喩ともっともらしい嘘が絡み合って、ユーモアを生み出しながら、独り者となってしまった生の哀しみが静かに描かれている。このとき、もっともらしい嘘から立ち上がってくる微かな希望にも、われわれは注意深い目をむけなければならない。⁽¹⁷⁾

以上のような理由から、「山椒魚」の基本テキストとしては、自選全集版の新稿を選択したい。新稿を基本とし、さらに深く読みたい読者、探求したい読者は、旧稿のテキストを探し、蛙と山椒魚の会話部分を読むという手順を踏めばいいのではない⁽¹⁸⁾か。

注

(1) 井伏作品の引用は、主に筑摩版全集(1964)のテキストを基本とした『井伏鱒二全集』第一巻(筑摩書房、1996・11)と、

井伏が改稿した『井伏鱒二自選全集』第一卷（新潮社、1985・10）を参照した。なお、「山椒魚」については、日置俊次「井伏鱒二「山椒魚」論」（『日本近代文学』1991・10）、日置俊次「井伏鱒二「山椒魚」新論——「トムとジェリー」理論をめぐって」（『紀要』青山学院大学文学部、2014・1）において、基本的な立場を明らかにしている。

(2) 「言語生活」（1976・2）の「現代文学とことば」という作家インタビューシリーズ第二回で井伏が語っている。

(3) 清水昭三「井伏鱒二——その文学と世界」（創樹社、1985・11、27頁）

(4) 野崎歓「水の匂いをするようだ 井伏鱒二のほうへ」（集英社、2018・8、26頁）。本書は「長きにわたり何も食べ物を口にしないのだから、山椒魚は激しい身体的衰弱に見舞われておかしくない。一編の結末部分で彼が「空腹で動けない」というセリフを口にする（後略）」（26頁）という指摘を展開するが、それは山椒魚のセリフではない。もし山椒魚だけが餓死するなら、蛙はなぜ空腹にならないのか、説明がない。江南亜美子はこの本の書評で「自説の展開を目的とするのではなく、それを丁寧に読者に理解させたいうえで、井伏鱒二という作家の仕事を再度かがやかせ、そちらのほうへと巧みに読者を誘う」（『著者に誘われて、井伏のほうへ』「すばる」2018・9）と評価し、また出久根達郎は書評で「本書は傑出した面白い作家論である」（『東京新聞』2018・9・23、インターネット版より引用）と述べている。出久根は、太宰

がかかわった「青ヶ島大概記」の「火山噴火の迫真の描写」について、井伏の創作だとする太宰の証言が誤っていて「井伏の主張する描写は、確かに資料の原文とはほぼ同じであった」と紹介している。しかし本書には「井伏の創作とみなしてはば間違いない」と全く逆のことが書かれている。逆でなければ「井伏の極度の自己韜晦とミステイフィケーション」（90頁）という結論に至らない。書評者も「すばる」や「東京新聞」の編集者も、本書を読んでいないのだろうか。

(5) 自然界では、サンショウウオの雄は岩屋で何か月も卵を守る。その間、ほとんど何も食べなくても生きながらえる生命力がある。しかしカエルは弱く、数日食べなければ死ぬ。環境によつては一日でも死ぬ。生餌の虫が豊富にいなければ、岩屋では暮らしていけない。

(6) 本論考では、カットされた末尾部分を残すべきかどうかという点に絞って、問題を考える。「幽閉」との関連や異稿の問題は、ここでは扱わない。新全集テキストで「單める」が「込める」と表記されるなどの異同はここでは問題としない。なお虚構は徹底して整理されているわけではなく、あるところで井伏はあえて混沌を呼び込んでいると考えられる。

(7) 沼田卓爾「井伏さんの録音テープ（一）」（『井伏鱒二全集』第十八卷月報15、筑摩書房、1998・1）による。

(8) 「少年少女日本文学館12 走れメロス・山椒魚」（講談社、1986・7）。一九八九年四月の時点ですでに十刷である。なお

小学生向けのこの本に、太宰治「魚服記」が載っている。父親が娘を犯す個所に、注はない。

(9) 鳥類の専門家である大阪市立自然史博物館の和田岳先生におうかがいした。「私を知る限りでは、ガンは潜水しません。ガン類の採食行動の論文を見ても、完全に潜水するという記述は見あたりません。そもそも水面採食ガモが潜るのはほんの数秒ですし、潜水採食ガモでも潜水時間はそんなに長くありません。」とご教示をいただいた。嘉瀬井整夫『井伏鱒二の博物誌』（林道舎、1995・3、35頁）は、井伏を博物学者であるとして称揚し、「すばらしい観察者」で、「学問の世界へとつながる」点を指摘している。これが井伏の定説的イメージであろう。

(10) 沼田卓爾「井伏さんの録音テープ（一）」のなかで、井伏は「タエト」はこしらえたんだ。（モデルは）花柳はるゑだよ。僕は花柳に言ったことがあるよ」と語っている。父がアメリカ人だという少女タエトは、虚構である。「花柳はるゑ」はアメリカ人の親をもつ芸能人で日舞花柳流の関係者かとも思われるが、湧田佑編『井伏鱒二事典』（明治書院、2000・12）にも記載はなく、不明である。

(11) 鈴木秀一「井伏鱒二「山椒魚」の指導（中間報告）」（『教授学の探究』1990・3）は、「岩屋」の描写場面（こけ、かび、藻、目だか、白い花弁など）の役割はなにか。これらの描写がなかったとしたらどうだろう」という問題提起をし、「ここに登場する植物、小動物は、いずれも小さく、みみっちく、見すばらしい存在

であり、山椒魚に嘲笑されるべき存在であるが、いまや幽閉された山椒魚は、逆にこれらの植物、小動物に神経を逆撫でされ、嘲られる状態になっている。そのことを思い知らされていくことによって、山椒魚の絶望感は深まっていく。（中略）こでも小えびを「よく笑う生物」と描くことによって意表を突き、笑いを誘い、山椒魚の絶望と悲しみに読者が同化することが拒絶される。」と説明する。性的な暗喩には触れていない。小蝦が山椒魚の腹に卵を産むという一節については、「小えびが「卵を生む」のは自然な行為としてありうる。それ以外の行為を想像するとすれば、休むとか、もつと産卵に適した所を探しもとめるとかといったことになろう。ところが「さもなければ」に続くのは「一生懸命に物思いに耽る」というのである。思いもよらない表現に意表を突かれ、笑いが生ずる。」と説明している。しかしエビは卵を産み付けない。井伏がわざわざ卵を持ち出した理由を考えなければならぬ。山椒魚と小蝦は、「生殖」という問題に促されて物思いにふけるのである。

(12) 松本武夫『井伏鱒二「宿縁の文学」』（武蔵野書房、1997・4、16頁）は、この山椒魚の行動について、「山椒魚は「コロップの栓をつめる結果」に終ることを自らの行動の内に学習したうえで、尚且つ「徒労」を繰り返していくのである。山椒魚にはもはや自分のしていることの訳が解らないのであり、ただこの現実に怒り、苦悩し、我を忘れて動き回っているのみである」と指摘する。しかし、コルクの栓を穴に押し込めるというエロティックなイメージに現れている通り、山椒魚は、自らのうちに宿る生命力、特に「生

殖」という生命力に衝き動かされていることを認識しつつ行動している。

- (13) 萩原得司『井伏鱒二聞き書き』（潮出版社、1985・4、129頁）に記録された井伏の発言。

- (14) 涌田佑「『サフランの根』洗い」（『井伏鱒二全集』第二十四卷月報14、筑摩書房、1997・12）。しかし、作品が百パーセントの嘘ということはあり得ない。井伏はその証言も含めて、何が本当で何が嘘なのかわからなくなるような磁界を意識して作り上げているということなのである。いかにも真摯な自然観察者だと思わせるような嘘をちりばめて、しかしあちこちにわざとたぬきの尻尾をのぞかせている。読者が騙されて快楽を感じているだけなのである。また、あらかじめ作品に百パーセントの計算ができていっているわけではなく、本当に間違えている部分や、無意識に嘘をついている部分があり、「ユーモア」と「あわれ」という接着剤によってそれらが混然一体となっているのが井伏的な手法なのである。

- (15) 「山椒魚」について」（『井伏鱒二全集』第二十四卷、筑摩書房、1997・12）より引用。初出は『現代作家自作朗読集』（朝日ソノラマ、1966・11）。仮名遣いは不統一。

- (16) 瀬戸内寂聴「慈悲の人」（『井伏鱒二全集』第十三卷月報23、筑摩書房、1998・9）

- (17) 養老孟司『バカにならない読書術』（朝日新書、朝日新聞社、2007・10、87頁）は、「山椒魚」が「子供でもその風景が見えてしまう」「すごい文章」だとして、叙景の力を指摘する。しかし

その叙景に矛盾があるという視点はない。

- (18) 桑名靖治「教室の中の山椒魚」（前掲『井伏鱒二全集』第十三卷月報23）は、「井伏の山椒魚の物語には、「幽閉」「山椒魚」（自選版）山椒魚」の三つの作品がある、と考えるのが妥当だろう。現行教科書の「山椒魚」は、すべて削除のない本文であり、私はその判断を支持したい」と述べている。「幽閉」は別作品としても、「山椒魚」に関しては、基準のテキストを一つに定めるべきであろう。旧稿は広く流布しており、容易に手に入る。

（ひおき・しゅんじ／本学日本文学教授）